

④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
平成27年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（企10）	企画情報部	61
第10回無形文化遺産部公開学術講座（*無01）	無形文化遺産部	62
無形民俗文化財研究協議会（*無02）	無形文化遺産部	62
文化財の保存環境に関する研究会（*保修03）	保存修復科学センター	63
文化財における伝統技術及び材料に関する研究会（*保修06）	保存修復科学センター	63
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*保修07）	保存修復科学センター	64
IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」（*保修02）	保存修復科学センター	64
総合研究会（企）	企画情報部	65
企画情報部研究会（企）	企画情報部	65

- *注
- ・第10回無形文化遺産部公開学術講座は、無形文化財の保存・活用に関する調査研究（①無01）の一環として実施した。
 - ・無形民俗文化財研究協議会は、無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（①無02）の一環として実施した。
 - ・文化財の保存環境に関する研究会は、文化財の保存環境の研究（①保修03）の一環として実施した。
 - ・文化財における伝統技術及び材料に関する研究会は、伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（①保修06）の一環として実施した。
 - ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①保修07）の一環として実施した。

平成27年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-15-5/5）

目 的

企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的として開催。今回で49回目を迎えた。

成 果

1. 第49回企画情報部オープンレクチャー「モノ/イメージとの対話」と題して4講演を2日間にわたり開催した。
第1日目：2015（平成27）年10月30日（金） 13:30～16:30 東京文化財研究所 セミナー室
「仁和寺阿弥陀三尊像と宇多天皇の信仰」 皿井舞（企画情報部主任研究員）
「十世紀の画師たち」 増記隆介（神戸大学大学院准教授）
第2日目：10月31日（土） 13:30～16:30 東京文化財研究所 セミナー室
「与謝蕪村の絵画に見る和漢」 安永拓世（企画情報部研究員）
「池大雅の山水図を考える」 吉田恵理（静岡市美術館学芸課係長）
2. 2日間でのべ247人が聴講した。聴講者にアンケートを実施したところ、177人から回答を得た。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」73人、「おおむね満足した」76人、「普通だった」11人、「不満が残った」4人、無回答13人。アンケート回答者の83.5%から満足感を得た。



オープンレクチャー会場



オープンレクチャー・チラシ

第10回無形文化遺産部公開学術講座（①無01-15-5/5の一部として実施）

2015（平成27）年12月18日、東京国立博物館平成館大講堂において、「邦楽の旋律とアクセント—中世から近世へ—」と題して公開学術講座を行った。入場者数309名。

プログラム

講演1 高桑いづみ（無形文化財研究室長）「明治以前の謡とアクセント」

実演1 と話 謡の復元「松風」ほか

実演 味方玄（観世流能楽師）

講演2 坂本清恵（日本女子大学文学部教授）「近世邦楽とアクセント」

実演2 と話 長唄「鶴亀」ほか

実演 稀音家義丸（長唄演奏家）・日吉栄寿（長唄三味線演奏家）・杵屋三澄那（長唄三味線演奏家）

無形民俗文化財研究協議会（②無02-15-5/5の一部として実施）

無形文化遺産部では、無形民俗文化財の保存・継承に寄与することを目的として、毎年無形民俗文化財研究協議会を開催している。第10回にあたる本年度は「ひらかれる無形文化遺産—魅力の発信と外からの力」をテーマとし、無形民俗文化財がどのように文化の魅力を発信し外部の力を呼び込むべきか、あるいは外部の者が地域伝承にどのように関わるべきかについて報告・討議を行った。その成果は報告書として刊行した。

日 時：2015（平成27）年12月4日（金）10:30～17:30

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

参加者：154名

テーマ：「ひらかれる無形文化遺産—魅力の発信と外からの力」

内 容：

【発表】

松井今日子（芸北民俗芸能保存伝承館）「壬生の花田植がユネスコ無形文化遺産になるまで—地域住民による保護と継承活動に着目して」

五十嵐千江（関川しな織協同組合）「関川のしな織—伝統技術による地域活性化と文化継承活動について」

柳沢拓哉（八戸ポータルミュージアム）「八戸ポータルミュージアムはっちの取り組み」

狩俣恵一（沖縄国際大学）「沖縄からの発信—竹富島の種子取祭芸能の継承—」

【総合討議】

上記報告者と下記コメンテーター、コーディネーターによる総合討議を行った。

コメンテーター：菊池健策（東京文化財研究所客員研究員）、小岩秀太郎（全日本郷土芸能協会）

コーディネーター：久保田裕道・今石みぎわ（無形文化遺産部）

総 合 司 会：飯島満（無形文化遺産部）

文化財の保存環境に関する研究会 (①必修03-15-5/5の一部として実施)

「文化財の保存環境の研究」プロジェクトでは、汚染ガスが高濃度となり、文化財への影響が大きい展示ケース内の空気清浄化に関する研究を進めてきた。本研究会では、これまでに行ってきた適切な内装材料選択のための放散ガス試験法の試案作成、内装材料の放散ガスデータの収集、解析などの結果を踏まえた、実験用に制作した実大展示ケースを用いた展示ケース内濃度の測定、気流の可視化、そして清浄化機能に関する試験について、さらに保存環境現場での汚染ガスの対策事例について報告した。

「文化財の保存環境」に関する研究会—実験用実大展示ケースを用いた濃度予測と清浄化技術の評価—

日 時：2016（平成28）年2月15日（月） 13:30～17:30

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

参加者：135名

講演者：佐野千絵（東京文化財研究所）「趣旨説明」

古田嶋智子（東京文化財研究所）「実験用実大展示ケースにおける放散ガス」

須賀政晴（岡村製作所）「実験用実大展示ケースの気流性状について」

呂俊民（東京文化財研究所）「実験用実大展示ケースを用いた清浄化と濃度予測について」

佐野千絵「空気清浄化事例と清浄化手法の提案」

文化財における伝統技術及び材料に関する研究会 (①必修06-15-5/5の一部として実施)

平成27年度は、これまで伝統技術研究室が中心となって取り組んできた文化財建造物の塗装彩色に関する調査と修理に関する総括と、今後の課題である日本産漆塗料の文化財建造物修理への使用に関する研究会を開催した。この研究会は、平成21年度に開催した第3回研究会の「建築文化財における漆塗料の調査と修理—その現状と課題—」、平成23年度に開催した第5回研究会の「建築文化財における伝統的な塗料の調査と修理」、平成24年度に開催した第6回研究会の「建築文化財における塗装彩色部材の劣化と修理」、平成26年度に開催した第7回研究会の「文化財建造物における木彫彩色の調査・修理・資料活用」、第8回研究会の「日光東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理」の続編ともいえる内容である。研究会では、日本産漆を文化財建造物に使用するために取り組んでおられる行政、生産者、修理者のそれぞれの立場の講師から、最新の情報を提供いただいた。

第9回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会「文化財建造物の塗装修理に対する日本産漆使用の現状と課題」

日 時：2016（平成28）年1月26日（火） 13:00～17:30

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

講演者：北野信彦（東京文化財研究所）「文化財建造物の塗装彩色修理と漆塗装」

清永洋平（文化庁）「文化財建造物への日本産漆100%使用に向けて—行政の取り組みから—」

中村裕（日本うるし掻き技術保存会）「岩手県二戸市浄法寺における漆生産の現状と課題—日本産漆生産地の取り組みから—」

佐藤則武（日光社寺文化財保存会）「日光東照宮修復の歴史と日本産漆の使用—塗装修理現場の取り組みから—」

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①必修07-15-5/5の一部として実施)

平成26年度は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」そして平成27年度には「明治日本の産業革命遺産」とユネスコ世界遺産への登録が続き、近代文化遺産が注目されており今後も近代文化遺産が世界遺産登録されることが期待されている。

これまで近代文化遺産の修復に関して、採用されてきた手法は、江戸時代以前までの建造物などに適用されてきた手法が準用される形であった。しかし今後、さらに修復の件数も増えることが予想される、近代文化遺産の特徴の一つでもある多種多様な材料が使われた文化遺産の修復作業に関して、いつまでも江戸時代以前までの修復手法の準用では対応しきれなくなるのは自明であり、早急な対応が望まれる。その際に重要となるのは近代文化遺産の修復理念であり、その土台となる保存理念である。

今回はこれまで、行われてきた保存・修復工事や計画されている修復工事などに関して、どのような保存理念や修復理念が適用されたのか検証しながら、今後必要となる保存理念や修復理念についてどのように考えていけばよいのか様々な分野の方々を招き研究会を実施した。

第29回近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「近代文化遺産の保存理念と修復理念についての研究会」

日 時：2016（平成28）年1月15日（金）10:00～17:15

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

講 演：中山俊介（東京文化財研究所）「近代文化遺産の保存理念と修復理念」

ロルフ・フーマン（ドイツ・産業考古学事務所長）「Large Scale Industries Preservation and Conservation」

伊東孝（産業考古学会会長）「近代文化遺産の保存理念と修復理念について考える—産業遺産の活用を通して—」

木村勉（長岡造形大学教授）「近代文化遺産の保存理念と修復理念 近代洋風建築・近代化遺産の現状・課題」

鈴木淳（東京大学大学院教授）「近代文化遺産の保存理念と修復理念 産業技術史の観点から」

IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」

(①必修02-15-5/5の一部として実施)

IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」を2015（平成27）年7月16日に開催した。モントリオール議定書締約国会議による2005年からの臭化メチル使用全廃、その10年という節目に、これまでの活動をふりかえりつつ、現状での文化財分野のIPMの活動状況、進展や問題点も含めて情報を共有し、現在の課題と、今後必要な方向性を考えるための場とすることを目的とした。講演者からは、日本や世界の国々での燻蒸やその後のIPMへの取り組みの紹介や、各館の様々な取り組みについていろいろな角度からの報告があり、有意義なフォーラムとなった。

日 時：2015（平成27）年7月16日（木）10:00～17:15

会 場：東京文化財研究所 セミナー室他

参加者：200名

講演者：亀井伸雄（東京文化財研究所）「開会挨拶」

- 齊藤孝正（文化庁）「モントリオール議定書締約国会議・臭化メチル使用全廃から10年によせて」
木川りか（東京文化財研究所）「世界の状況と現在の処置法の選択肢について」
三浦定俊（文化財虫菌害研究所）「文化財IPMコーディネータについて」
本田光子（九州国立博物館）「建築段階からのIPM、九州国立博物館の歩み」
長屋菜津子（愛知県美術館）「IPM業務仕様書の一事例について」
園田直子（国立民族学博物館）「博物館環境データ（生物生息調査、温湿度モニタリング）分析システム・スモールパッケージの開発」
日高真吾（国立民族学博物館）「IPM実現のための予算獲得について—国立民族学博物館の事例から」
斉藤明子（千葉県立中央博物館）「タバコシバンムシとの戦い—千葉県立中央博物館の例—」
青木睦（国文学研究資料館）「アーカイブズの保存計画におけるIPM」
朝川美幸（仁和寺）「寺社収蔵庫におけるIPM」
間淵創（三重県総合博物館）「博物館施設におけるカビ等のモニタリングとデータの活用」
佐藤嘉則（東京文化財研究所）「古墳公開保存施設におけるIPMの取り組み」

総合研究会（④企）

総合研究会は、各研究部・センターの研究者がプロジェクトの成果や経過を発表し、その内容に関して所内の研究者間で自由に討論する場である。平成27年度は下記のスケジュールで実施した。

- ・第1回 2015（平成27）年10月6日（火）
発表者：吉田直人（保存修復科学センター）「展示照明としての白色LED」
- ・第2回 2015（平成27）年11月10日（火）
発表者：岡田健・吉原大志（保存修復科学センター）「文化財防災ネットワーク推進事業と文化財防災・危機管理に関する調査研究」
- ・第3回 2015（平成27）年12月1日（火）
発表者：津田徹英（企画情報部）「14世紀絵巻詞書総覧構想と有効利用について—京都・金蓮寺本「遊行上人縁起絵巻」での適用事例を中心に、その即効性と限界を考える—」
- ・第4回 2016（平成28）年1月12日（火）
発表者：高桑いづみ（無形文化遺産部）「楽器行脚20年—無形文化財としての楽器研究、その問題点—」
- ・第5回 2016（平成28）年2月2日（火）
発表者：川野邊渉（文化遺産国際協力センター）「有機化学者から見た文化財保護—実体験を中心に—」
- ・第6回 2016（平成28）年3月1日（火）
発表者：田中淳（副所長）「近代日本美術の基層をめぐって—岸田劉生を中心に—」

企画情報部研究会（④企）

企画情報部ではほぼ月に1回のペースで美術史研究者を中心とする研究会を開催して、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに討議によって充実を図っている。平成27年度の開催内容は下記の通り。

④研究集会・講座等 Area19

- 4月21日(火) 二神葉子(企画情報部)「世界遺産委員会における諸課題とその解決、及び世界遺産条約の文化財保護への活用に向けての試論」
- 6月4日(木) 安永拓世(企画情報部)「伝祇園南海筆「山水図巻」(東京国立博物館蔵)について」
富澤ケイ愛理子(セインズベリー日本藝術研究所)「在外コレクションにみる近代日本画家とその作画活動—メトロポリタン美術館所蔵「ブリンクリー・アルバム(近代日本画帖)」の成立と受容を中心に」
- 6月30日(火) Matthew McKelway(コロンビア大学)「南紀下向前の長沢芦雪: 禅林との関わりをめぐって」
- 8月31日(月) 高山百合(福岡県立美術館)「黒田清輝宛岡田三郎助書簡 翻刻と解題」
松本誠一(佐賀県立博物館・佐賀県立美術館)「岡田八千代の小説から見た岡田三郎助像」
- 9月29日(火) 志村明(絹織製作研究所)、コメンテーター: 秋本賀子(絹織製作研究所)「絹生産における在来技術について」
- 11月24日(火) 加藤弘子(日本学術振興会特別研究員)「徳川吉宗が先導した視覚と図像の更新について—岡本善悦豊久の役割を中心に—」
- 12月22日(火) 石井恭子(保存修復科学センター)「「紅白芙蓉図」改装の可能性と受容について」
- 1月13日(水) 研究会「美術史家矢代幸雄における西洋と東洋」
山梨絵美子(企画情報部)「ベレンソンと矢代幸雄をつなぐ両洋の美術への視点」
ジョナサン・ネルソン(ハーバード大学ルネサンス研究センター)「東洋人の眼から見たサンドロ・ボッティチェリ—矢代の1925年のモノグラフ」
越川倫明(東京藝術大学)「矢代幸雄著『受胎告知』を再読する」
高岸輝(東京大学)「矢代幸雄の絵巻研究」
塚本麿充(東京大学東洋文化研究所)「矢代幸雄と1930-45年代の中国美術研究」
- 2月23日(火) 江村知子(文化遺産国際協力センター)「光琳の「道崇」印作品について—尾形光琳の江戸滞在と画風転換」
- 3月29日(火) 山下善也(東京国立博物館)「狩野山雪筆「武家相撲絵巻」一巻について」